倫風宏話

平和の礎、「我も人もの仕合わせ」の実践

上廣哲治

暑い夏の訪れとともに、「平和祈念朝起会」の月を迎えました。七十二年前の八月六日は、言うまでもなく広島に原子爆弾が投下された日です。九日には長崎にも落とされ、十五日にわが国は敗戦を迎えることになります。

上廣哲彦初代会長は、広島の爆心地から約二キロ離れた横川駅のトイレに入った瞬間に被爆しました。長い間、原爆の後遺症と闘いながら、二度と戦争をしてはならない、平和な国をつくらなければならないという使命感に駆られて、すべての人々が仕合わせに生きる道を感得し、その道の普及に奔走いたしました。不戦を誓い、平和を守るのは、わが会創設以来の使命なのです。

戦後生まれの私は、いわゆる「戦争を知らない世代」の一人です。ですから凄惨きわまりない戦争を、書籍や映像で知るしかありません。「戦争は、かくも悲惨なものだ。だから二度と起こしてはならない」と強く胸に刻んではいても、その悲惨さを想像で補うしかないのです。戦争を体験した世代とは異なり、現実体験がないという意味において、不戦意識にはやや弱い部分があるのは仕方のないことかもしれません。ただ戦後世代は、戦争の悲惨さが肉体化されていなくとも、敗戦から今日まで続く平和な時代を生きて、平和に潜む危うさであったり、息苦しさのようなものを鋭敏に感じとっているように思うのです。平和とは、単に戦争がない状態を指すのではありません。いかなる平和なのか、その内実が問われているのです。すべての人々が幸福でなければ、真の平和とはいえないからです。

およそ十年前、貧困にあえぐ一人の青年が論壇誌に、自分にも幸福になるチャンスを与えてほしいという趣旨の文章を発表しました。当時三十一歳でフリーターの彼は、収入が少ないために、実家から独立することさえままなりません。将来は正社員となって自立し、やがて結婚して幸福な家庭を築く夢を描いています。ところがいくら努力しても正社員になるチャンスは与えられず、格差社会の底辺から抜け出すことができないと嘆きます。平和で安定した社会は、変化のない不自由で閉塞した社会になることがあります。

「社会が平和の名の下に、私に対して弱者であることを強制しつづけ、私のささやかな幸せへの願望を嘲笑いつづけるのだとしたら、そのとき私は（略）それ（戦争）を選択することに躊躇しないだろう」（赤木智弘「『丸山眞男』をひっぱたきたい　31歳フリーター。希望は、戦争」）。彼は誰よりも戦争を避けたい若者の一人です。その悲惨さを痛切に感じてもいます。それでも社会的な弱者が幸福への道を閉ざされることによって成り立つ平和だったら、あえて戦争を望みたいと過激な論調で訴えたのです。

一見、平和に見える社会であっても、そこに機会における不平等や、埋め難い格差があるとすれば、その不満が鬱積し、偏った思想から、戦争を期待する空気が社会に蔓延していく可能性もまったくないとは言いきれません。自分一人の幸福を守るだけで他の人々の幸福を蔑ろにしたら、平和は守れないの

ではないでしょうか。これが、戦争を知らない世代が感じる平和に潜む危うさなのです。

わが会は、社会が抱える様々な問題に対して、倫理的に生きることで仕合わせに至る道を提示することはできても、それを是正することはありません。恐らくそれは政治家や社会運動家、また行政に携わる方々の仕事でしょう。私たちにできるのは、「我も人もの仕合わせ」が実現する社会に少しでも近づけるように、今できる実践に日々励み、仕合わせの実現を積み重ねて、一歩一歩着実に「共生社会」に向かって歩んでいくことだけです。「平和を守る」には、いかにも迂遠な努力に見えますが、それが、いやそれこそが平和を守るための基礎の基礎、礎になっていくに違いありません。

今年、生誕百二十周年の節目に当たる哲学者の三木清は、日中戦争の始まった翌年の一九三八（昭和十三）年に『人生論ノート』連載の執筆を始め、太平洋戦争の始まった一九四一（昭和十六）年に、それを一冊の本にまとめて刊行しました。当時の社会は戦時色に染まりつつあり、徐々に人生における幸福を思うゆとりが失われていきました。

彼は『人生論ノート』の「幸福について」で次のように書いております。

「我々の時代は人々に幸福について考える気力をさえ失わせてしまったほど不幸なのではあるまいか。幸福を語ることがすでに何か不道徳なことであるかのように感じられるほど今の世の中は不幸に充ちているのではあるまいか」

「あらゆるものの名において人間的な幸福の要求が抹殺されようとしている場合、幸福の要求ほど良心的なものがあるであろうか。（略）幸福の要求が今日の良心として復権されねばならぬ」

「幸福は徳に反するものでなく、むしろ幸福そのものが徳である」

三木清はいかなる時にあっても、幸福を求める大切さを説き続けました。また、「過去のすべての時代においてつねに幸福が倫理の中心問題であった」と書き、幸福こそ倫理の中心問題でなければならないと主張したのです。

およそ五か月後に敗戦を迎える一九四五（昭和二十）年三月、三木清は思想犯の友人を匿った罪で投獄され、八月十五日の終戦の後も釈放されませんでした。拘置所で得た病が原因で九月二十六日、誰にも看取られることなく亡くなりました。四十八年の短い生涯でした。「幸福について」の中で、彼は次のような文章を書いています。

「幸福をもって（略）あらゆる困難と闘うのである。幸福を武器として闘う者のみが斃れてもなお幸福である」

多くの人々は平和であるから幸福を求めることができるといいます。確かにその通りなのでしょうが、わが会では一人ひとりの会友が、「我も人もの仕合わせ」の実践に励むから平和を守ることができると考えます。それが、「平和祈念朝起会」の意義ではないでしょうか。

では最後に今月の実践です。「平和」とは、争いや災いなどがなく、世の中や暮らしが穏やかな状態にあることです。「平和祈念朝起会」では、戦争のすべての犠牲者へ想いを馳せて、今ある平和の尊さを胸に刻んでいただくのはもちろんのこと、足下の家庭や朝起会場が、波風なく、平らかで穏やかな状態、愛和に満ち溢れているかも点検いただきたいと思います。その上で、わが会が創設以来一貫して唱導してきた「家庭愛和」から始まる「我も人もの仕合わせ」。この教えの深遠な真理を噛みしめて、日々の実践に精励いただきたいのです。